

佳作

六日間の収穫

広島県 呉市立和庄中学校二年 高橋のな

「最悪だ…。」

三十八度三分の熱。夏休みそうそうコロナにかかってしまった。部活の練習も発表会も行けないし、宿題もできない。しんどいしいいこと一つないと思っていたけれど一つ大切な収穫があった。

コロナということが分かってから、もちろん家から出ることなく家の中でも常に家族と離れて生活していた。本を読むのもしんどかったので寝ているかぼーっとしているかのどちらかだった。唯一の楽しみと言えば食事のとき。一日に三回おとずれる私の一大イベントだった。母がおぼんにのせたおかゆを静かにそばに置いて、

「食べられそう？」

と声をかけてくれる。母もマスクをしていたため顔はよく見えなかったが、ずっと部屋に一人で家族不

足だった私にとっては少しでも家族と接する大事な時間だった。母には二度も病院に連れて行ってもらった。申し訳なさど感謝でいっぱいだった。

母が仕事のときは祖母が面倒を見てくれた。少しずつ元気になってくるとアイスやゼリー、ジュースを持ってきてくれた。食べることが好きな私を元気づけようとしてくれていたのだとひしひしと感じた。すぐくうれしかった。それでも一人でいる時間の方が長く感じた。担任の先生がおっしゃっていた「人間らしく生きる」ということは人と関わって生きていくことだと思う」という意味が分かった気がした。

家から出てはいけない六日間のうち四日ほど過ぎると体調が回復しいつも通りの生活に戻りつつあった。すると寝こんでいたときのように感謝を感じる機会が減っていることに気がついた。常日頃から愛情をそそいでもらっているはずなのに、家族ならなおさら一番に優しさに気づける距離なのに、いつもに気づけていなかったことにはっとした。そしてこんな時にしか優しさに気づけないなんて情けないとも思った。ご飯を作ってくれる、挨拶をかわす、寝こんでいた時に感謝を感じたことは毎日家族がしてくれていることだった。

私はすぐネガティブな考えになる。そのためポジティブに次に生かせる考え方をしようと思った。一番近い距離なのに気づけていなかったけれどすぐに気持ちいを伝えることができる距離でよかったと思った。

身近な存在だからありがたい事もあたり前だと思っていた。これからはあたり前だと感じてしまっていることに言葉でありがどうを伝えよう。大事なことに気づけた六日間だった。